2008年度 第86回 関西学生サッカーリーグ（後期・第４節）

１０月１１日（土）　山城総合運動公園太陽が丘陸上競技場

第１試合　関学大　vs　大教大

順調に勝ち点を伸ばす関学大の強みは、心身共に備わったタフさである。タフという言葉は抽象的な響きではあるが、対戦経験のある他校の選手に印象を尋ねると「関学の頑張るサッカーは相手として苦手」という返答が多い。その関学大が、「よりタフなチームだと思うので、気が抜けない。」（成山一郎ヘッドコーチ）と警戒した大教大。この試合、大教大はやはりタフであった。そしてスマートに攻略し関学大を倒した。

サッカーにおける先制点の与える影響を、最も解り易く現したゲームでもあった。前半6分にセットプレーから大教大が先取すると、そこからは堅守速攻。関学大の3バックのサイドやギャップをシンプルなカウンターで狙い続ける。この日は、大教大の2トップ、⑩三好洋央と⑨森原慎之佑の決定力が光った。カウンターから得た絶好機を、三好は鮮やかなループで決め、森原は冷静な駆け引きで2得点。シュート10本で4点と効率良くカウンターアタックを機能させた。

関学大は、実に25本のシュートを放ったが、枠外かGK正面。それでも2点は返したが、及ばず。大教大が、残留争いに生き残るために、大きな大きな勝ち点3を刻んだ。

（文：サッカーライター　ハヤシ　ヒロヒサ）

関学大	2	0－3 2－1	4	大教大

得点（アシスト）者	得点（アシスト）者
56分　14 出口	6分　5 大久保（22 佐藤）
89分　11 桑原（26 梶川）	16分　9 森原（30 大庭）
	22分　10 三好（15 鳥尾）
	54分　9 森原（24 中村）

第２試合　びわこ大　vs　姫獨大

びわこ大	1	1－0 0－1	1	姫獨大

得点（アシスト）者	得点（アシスト）者
40分　34 浅津（13 平野）	81分　35 玉橋（12 塚田）

びわこ大の志向するサッカーの質の高さを知るとともに、サッカーの恐ろしさも改めて教えられたゲームだった。

姫獨大の昌子力監督は、「相手を恐れることが一番いけない。マイナスの循環を生む。」と試合前からメンタル面を気にしていた。しかし、キックオフから前半45分間、ピッチを俯瞰すると、姫獨大の腰は引けていたようにしか映らなかった。それを表す数字が、前半のシュートゼロである。確かに、びわこ大は、ショートパスを丁寧に繋ぎ、パス＆ムーヴが途絶えない、流れるようなサッカーを見せた。そして、前半終了5分前の良い時間帯にFW⑬平野甲斐の突破から、MF 34 浅津知大が頭で合わせて先制。完全なるびわこ大の試合である。

後半に入っても、大きく流れは変わらなかった。びわこ大がハーフコートに近い形で攻め込む。ただしパスは回すものの、完全に崩しきれなかった事が、後々ツケとして回ってきた。姫獨大の取れる戦法は唯一、ロングボールでFWをDFライン裏に走らせることしかなかったが、それを粘り強く続けた成果が生まれる。後半36分、裏を取ったDF⑫塚田隆三のクロスを、ファーに走り込んだMF 35 玉橋尚武が蹴り込む。

両者勝ち点1だが、重みには違いがあっただろう。

（文：サッカーライター　ハヤシ　ヒロヒサ）

１０月１１日（土）　山城総合運動公園太陽が丘球技場Ｂ

第１試合　同　大　vs　京産大

京都勢同士、順位も6位、7位と拮抗したチームの激突。後期を勝利でスタートした同大も、その後は連敗と下降線。一方、上位チームを連破、姫獨大を一蹴し、3連勝の京産大。今のチームの勢いがそのまま結果に反映した試合となった。

同大の「個」の力を封印するため、京産大・古井監督は「1人に対して2枚、持ち味のドリブルはさせない」と過去3戦同様守備から入る。同大はそんな京産大のペースに飲み込まれ意図のある攻めができない。そして24分、京産大は狙い通りのカウンターからMF 54 桑田康平の強烈なシュートが決まり均衡を破る。 追う立場となった同大だが「前半は悪すぎた。自分たちから仕掛けられなかった（同大・望月監督）」という内容に終始した。

後半、同大はサイドからの崩し、小気味よいパス交換で中央突破を仕掛けるがシュートの思い切りが悪くチャンスをつぶしてしまう。そして38分にはCB⑤永戸康士が2枚目の警告で退場と、追撃に水を差す。そして京産大は直後にFW⑲足立達哉が一度はGKに阻まれながらもこぼれ球をヘッドで押し込み試合を決めた。京産大はこれで4連勝。しかし「勝利への執念を全員が持っている」と古井監督は貪欲だ。

（文：サッカーライター　貞永　晃二）

同　大	0	0－1 0－1	2	京産大

得点（アシスト）者
24分　54 桑田
84分　19 足立

第２試合　関西大　vs　立命大

関西大	2	0－1 2－0	1	立命大

得点（アシスト）者	得点（アシスト）者
76分　19 金園（6 佐藤）	34分　43 登（44 伊庭）
82分　19 金園	
（27 保手濱・17 阪本）	

前期2位で折り返しながら後期は1勝1分1敗と調子が上がらない関西大。対する立命大も前後期を通じて連勝が一度もなく、依然安定感を欠く戦いぶり。

「前半から点を獲りにいった」という立命大・米田監督の言葉通り、いきなりMF 25 芝尾泰孝がシュート。これは惜しくも外れたが、この先制パンチが効いたのか、立命大の攻め込みが目を引き、シュート数でも関西大を上回る。その後は一進一退の展開となるが、34分、DF 44 伊庭徹矢のパスを2年生FW 43 登弘幸がDFと競り合いながら決め立命大がリードする。

後半は互角の展開が続いたが、チャンスは立命大に多い。決定的だったのは57分。MF⑩山口卓也がフリーのチャンスを右に外してしまう。2点差がつけば試合は決まっていただろう。後半17分、関西大は思い切って2人を同時交代し勝負に出る。すると31分、DF⑥佐藤祐起のクロスをFW⑲金園英学がヘッド、こぼれたところを粘って蹴り込み試合は振り出しへ。そしてこの金園が37分、MF 27 保手濱直樹のクロスをヘッドで合わせ試合をひっくり返しそのまま押し切った。2点ともアシストは交代投入された選手。関西大のベンチワークが冴えた試合だった。

（文：サッカーライター　貞永　晃二）

Result

JUFA Kansai

１０月１３日（月・祝）　舞洲運動広場（球技場）

第１試合　桃山大　vs　近畿大

試合はハーフラインの位置が違うというハプニングにより25分遅れで始まったものの、両者とも落ち着いて臨んだ。

前半から試合を支配したのは3連敗中の近畿大。降格への危機感、また来期のチーム作りも見据えた新人起用が新たな風を吹き込み、果敢に攻撃のチャンスを作る。一方、ここまで負けなしの桃山大は前半を無失点で押さえ、後半はMF⑦枝本雄一郎などキーマンをマークし、守備に徹した。しかし攻撃はカウンターの一本調子になり、決定的な場面を作れなかった。両者我慢の時間が続く中、迎えた後半38分。MF⑦枝本のフリーキックを、怪我で2試合ぶりの出場となった近畿大・主将のDF⑤山口惇也が頭であわせ、待望のゴールが生まれる。終了間際にもMF⑧山梨洋希の中央突破から、FW⑯前田竜太が決め2－0で近畿大が後期初勝利をあげた。

「チームがバラバラ。考えていることを統一していかないといけない」とDF③北江進吾主将が話す桃山大は反撃も叶わず、痛い1敗。貴重な先制点を挙げた近畿大の山口は「最後まで集中を切らさなかったことが勝因。伝統のあるチームに粘り勝ちできてよかった。」と安堵の表情を浮かべた。

（文：フリーライター　久住 真穂）

桃山大	0	0－0 0－2	2	近畿大

得点（アシスト）者
83分　5 山口（7 枝本）
89分　16 前田（8 山梨）

第２試合　阪南大　vs　大院大

阪南大	1	1－0 0－1	1	大院大

得点（アシスト）者
30分　43 棚橋（6 井手口）

得点（アシスト）者
80分　10 佐藤

先に行われた試合でびわこ大が引き分けたため、首位奪還へ絶好のチャンスが訪れた阪南大。対する大院大は、近畿大、大教大の勝利を受け、負ければ自動降格圏内へ。後がない状況となった。

試合は互いにしのぎを削る戦いで、阪南大は⑪木原正和を軸に仕掛けるが、ラストパスがつながらない。苦しい時間が続いた30分、MF⑥井手口正昭から、後期になって頭角を現したFW 43 棚橋雄介がDFラインの裏を抜けゴール。負けは許されない大院大は左サイドを突破口に攻めるが、そこはセンターバックの吉川、澤崎のコンビがきっちり押さえシュートを打たせない。後半に入っても「よく我慢してくれた」（大院大・藤原義三監督）というように、受け手に回らず決死の攻めを見せる大院大は後半35分、苛立ちからか阪南大GK竹重安希彦がMF⑦加藤健太を倒してしまいPKを奪取。これをMF⑩佐藤直裕がきっちり決めて同点に追いつき、貴重な勝ち点1を手にした。

阪南大の須佐徹太郎監督は「中心選手として責任を感じてもらわないと」と厳しい。両者で勝ち点1を分け、優勝、残留をめぐる熾烈な争いは依然混戦模様のままだ。

（文：フリーライター　久住 真穂）

～第４節の風景～
このキックでチームの勝利に貢献！　◆枝本 雄一郎 選手（近畿大・２年）◆

10月13日（月・祝）舞洲（桃山大ー近畿大）
■ 撮影：フリーライター　久住 真穂 ■